



新・講談社の絵本『かぐや姫』
織田観潮 絵（講談社 2001年）

『竹取物語』に学ぶ死生観 —『竹取物語』の深層—

評者

窪寺俊之
(大学教員)

「かぐや姫」として親しまれてきた『竹取物語』は、子どもの心を浮き立たせた絵本の一つです。竹の中から生まれたかぐや姫は、子どもの心を夢の国へと誘うには十分でした。誰でも一度は読んだことがありでしょう。このファンタジックな世界が子どもたちの心を豊かに養ってきたことは間違いありません。私も三歳か四歳の時、母に読んでもらった記憶があります。小学校の図書館にも、子ども向けの本に『竹取物語』がありました。恥ずかしいことに、この古典が平安時代の高貴な身分の女性たちのために書かれたとは知りませんでした（知ったのは、高等学校の古典の時間です）。日本最初のひらがな文学の物語として誕生しました。

物語の構成

この物語には三つの山場があります。一つ目は竹の中から小さな女の子が生まれたとこ

窪寺俊之（くぼでらとしゆき）
聖学院大学教授。1939年生まれ。専門：スピリチュアルケア学。著書：『スピリチュアルケア入門』（三輪書店）、『スピリチュアルケア学序説』（三輪書店）、『スピリチュアルケア学概説』（関西学院大学論文叢書）。

ろです。竹取の翁が竹取りに出掛けて、根元が光っている竹があり、切ってみると小さな女の子が出てきました。私は自分の妹が生まれたような錯覚を覚えた記憶があります。

二つ目は美しく成長したかぐや姫を妻にしたいと求婚する公家たちが集つてくるところです。かぐや姫は、皇子、大納言、中納言、右大臣などに難問を投げかけて求婚を断ります。どの求婚者も高い身分の人たちです。ここにも、竹の中から生まれたかぐや姫が、高い身分の人たちに屈しない痛快さがあります。

三つ目、ここはこの物語のクライマックスです。夏の夜、かぐや姫が暗い顔をして泣いていました。竹取の翁がかぐや姫に尋ねると、かぐや姫は、自分はこの世の人ではなく、天に戻っていかなくてはならないと告白します。かぐや姫が来て以来、老夫婦は裕福になり、不自由のない生活になりました。かぐや姫を失うことを怖れた翁はかぐや姫に留まるよう

説得しますが、彼女はどうしても天に戻らなくてはならないと心を変えません。翁は帝に頼んで家の周りを三千人の兵士で警備し、おばあさんはかぐや姫を抱いて土蔵の中に隠れました。ついに、天から美しい着物を着た天人が車を引いてやって来ました。辺りが明るくなりました。天人たちを見た兵士たちは力が抜けて戦うことができません。かぐや姫は、翁夫婦や兵士たちに嚴重に守られていたにもかかわらず、天人に導かれて天に戻っていきます。

絶対不可避の別れ

私が興味を引かれたのは、かぐや姫と翁夫婦との「別れ」です。かぐや姫は翁夫婦の宝ですから、翁夫婦の悲しみは普通ではありません。何としても避けたい別れです。しかし、かぐや姫は「どんなことをしても、避けられません」と翁に告げます。

ここを読んだ時、私の経験とピッタリと重なるものがありました。それは私自身が大阪の淀川キリスト教病院でチャブレン（病院付き牧師）をしていた時の経験です。終末期ガン患者をたくさん見送ってきました。また、病気が発見された時から、ガンという病気を抱えて生きるつらさや苦しさを毎日のように聞いてきました。すべての患者さんに「先生、何とか治らないでしょうか」と言われて、私は言葉に詰まりました。一縷の望みでも見つけたいという生への願望です。特に、幼い子を持つ若い人や、高齢の父母を持つ人は、何とかして死を避けたいと願います。幼い子どもや年老いた父母をみてやりたいと切望します。そんな叫びを聞くたびに、私も自分のことのように心が痛みました。死という別れは現代医学では回避できないのです。ここにあるのは非回避の死の別れの悲しみです。

私は、『竹取物語』が語っている「別れ」は

普通の別れとは違うと感じました。絶対不可避の別れです。この世にはいろいろな別れがあります。絶対不可避の別れは「死別」しかありません。そう思った時、私の頭では終末期ガン患者の「死別」が重なって見えてきました。現代医学では回避できない「死別」の悲しみです。人間が死ぬべき存在であることは人類の不変的事実です。良い薬が開発され、延命のための人工呼吸器などの技術が進歩して生存率が高まっても、死を避けることはできません。そして、愛する者との死別の悲しみはいつの世でも変わりありません。

病院で見てきた死別、悲嘆と、『竹取物語』の翁夫婦の別れと悲しみが重なりました。『竹取物語』をホスピスの体験の視点から読むと、そこにはすべての人間が負っている死別と悲嘆という避けられない現実があります。『竹取物語』はこの大きな問題を扱っていると感じました。

悲しみの緩和

さらに、もう一つのことには気付きました。

ここには死別の悲しみを緩和する鍵があることとです。『竹取物語』では、天人たちがかぐや姫を迎えに来る場面が美しく描かれています。ここでは「別れ」を天からの「迎え」と理解しています。その迎え方も、天人は車を引いてかぐや姫に最大の敬意を払って迎えます。ここには死の不安や怖れを緩和して死後への希望を見つけ出そうとする意図が見えます。

患者さんはしばしば「早く迎えが来ればいいのに」と漏らします。また、高齢になり身体が不自由になった人が「もうそろそろお迎えが来ればいい」と言う言葉を聞きますが、日本人の心の内には死を「迎え」ととらえてきたことがわかります。この物語が死別の悲しみを扱いながら、死は天に「迎えられる」と考えたことは、驚くべき知恵です。日本人

は死を明るく理解しています。

死後の世界

さて、この世から別れて人はどこに行くのでしょうか。

天人に伴われてかぐや姫は天に戻っていきました。そして、天の国の人たちは親切で優しい人たちです、とも書いています。また、向こうの国では人は年を取らないとも書いています。この世の人間の煩わしさや老いる悲しみから解放された楽園がイメージされています。年を取ることも別れることもなく、安楽にいつまでも過ごせる世界です。

日本人はいつ頃からこのような考え方をしたのでしょうか。実は、『竹取物語』は、大きく分けて三つの資料から書かれたことがわかっています。かぐや姫が竹の中から誕生する個所、五人の貴人に求婚される個所、それと天に帰還する個所です。この三つは、最初は

別々の物語として存在していました。その三つの物語を資料として組み立て直してできたのが『竹取物語』です。最初と最後の箇所は日本の古い民話で、五人の貴人の求婚の部分は漢籍の素養のある人によって書かれています。民話の部分は、似た民話が各地に残っています。民話は人々の口から口に語り継がれて出来上がったものです。口伝という形で伝承される過程で、人々の苦悩や願望が物語の中に入り込んでいきました。『竹取物語』には日本人の心情が込められていると言えます。

仏教伝来の年には諸説ありますが、一般的に五三八年ごろといわれています。『竹取物語』の資料となった民話は、仏教伝来以前の日本人の死生観を表しています。仏教は阿弥陀仏の慈悲にすがって極楽浄土に往生すると語ります。『竹取物語』には仏教的救済思想は見られません。阿弥陀仏の慈悲にすぎたのではなく、天から丁重に迎えが来ると考えました。

日本人が死者を見送り、悲しみを体験する中で、美しい天を創造したのだと考えられます。

私は終末期ガン患者へのスピリチュアルケアに関心を持っています。スピリチュアルな世界とは、特定の宗教の枠を超えて神秘的・超越的世界に触れる魂の世界です。現代医学でも終末期ガンは完治できません。「死が怖い」「死んだらどこに行くのか」と泣き叫ぶ患者さんをたくさん見てきました。これらの叫びには心や魂へのケアが必要だといわれています。その一端を担うのがスピリチュアルケアだともいわれます。世界保健機関(WHO)の『専門委員会の報告書803号』では、心や魂へのケアを受けることは患者の権利であると明記しています。現代人は宗教に警戒心を持ち、宗教から離れています。宗教的ケアが困難な人にも、スピリチュアルケアは可能だとわかってきました。スピリチュアルケアは、患者の立場を尊重して、本人の魂に寄

り添い、生きる意味や死後の問題を一緒に探しながら歩むケアです。

すで見ましたように、『竹取物語』は、死を「お迎え」と理解し、死後の世界があると語っています。そうすることでこの物語は、宗教を警戒する現代人の死や死後の不安や恐怖を和らげる「癒しの文学」になっています。それも、現代人が知性や理性という合理性を重視しながらも、どこかでそれを超える神秘的・超越的な世界を求めている魂に触れるスピリチュアルな文学です。仏教が日本に伝来する前から日本人の魂を支えてきた『竹取物語』は、今後も多くの人に慰めと希望を与え続けるでしょう。

私は青年期になってクリスチャンになったのですが、それでも死は天への帰還という思いがどこかにあるのは、幼い時に母が読んでくれた「かぐや姫」に由来しているかもしれません。そんなことを考えると、幼い時に触

れる絵本が持つ重要性を思います。現代人は、科学的思考を尊重して死後の世界など信じない人がほとんどです。にもかかわらず、天から「お迎えが来る」とどこかで感じているとしたら、「かぐや姫」の絵本の影響かもしれません。

子どもの心に死後の世界への夢を育てることは、保育者の務めでもあります。現代は科学的思考方法に頭が固まりやすい時代です。また、成績や成果に目を奪われやすい時代です。夢や想像力を持つ子どもたちを育てたいものです。人生の困難や災難に遭った時に、生きる力となるでしょう。ファンタジックな世界に遊ぶ余裕が、現実を多角的に考える道を開いてくれます。夢の世界を描く『竹取物語』は、いつまでも私たちに心の余裕と希望を与えてくれるでしょう。